

三一新書 520

小説 兜町

し ま

清水一行著



三一新書

町ま 兜し 小説

清水一行著

三一書房

小説／兜町／目次

第一章 スターリン暴落 5

第二章 神武相場 53

第三章 岩戸相場 101

第四章 撤収作戦 165

第五章 凋落 214

第一章 スターリン暴落

1

大戸元一は新聞を閉じた。陽の位置が迂回してきた。

大戸は一度たたんだ新聞をかざして、黄味がかった午後
の直射をさえぎった。

「一ヵ月ほど前に、佐府良輔君が訪ねてきた」

「研究所をはじめられるそうですね。ああいう豊かな知識と経験を持ったジャーナリストが、株の評論をしてくれるのは、力強いことです」

同乗の久住時雄が答えた。大戸は青味がかった瞳を歩道にむけた。日本橋通りを行く人の流れが一本の帯のよう
に続いていた。

「瀬戸浩将——」大戸はポツンとつぶやいた。

そして「うちにも大衆に呼びかけるスターが必要になるな」と言いたした。久住時雄の角張った顎がかすかにう
なずき、

「弘三郎さんが、会社へ入ってくださるといいのです

が」

と大戸の独り言に答えるように言った。だが大戸は答
えなかった。口を強く結ぶと、証券界の総帥としての威
厳がその面ににじみでてくる。しほりだされた脂肪を思
わせる純白の積層雲が、そりかえったビルの肩にかかっ
ていた。車が信号待ちで停る。大戸が久住をチラと見た。
「山鹿悌司を知っているか」

久住は軽く首をかしげ、一呼吸おいて「昔、店にいた
男でしたね」と言った。

「船を買いたいから一千万円貸せと言ってきおった。魚
をとるのだそうだ」

「魚を?……」

「漁師さ。ばかな奴だ」

久住はうなずいたが、関心はしめさなかった。車が走
りだし、ムツとするような湿っぽい風が、顔に当って不
快だった。

「どなりつけてやった」

その一言に久住は大戸を見かえした。どういう意味の
言葉なのか、とっさには判断がつかなかった。大戸はネ
クタイの結び目に手をやり、窮屈そうな咽喉もとをゆる

めた。

「ところが二、三日前、うちのヤツに手紙をよこした」

大戸は鼻にかかった濁りのある声で続けた。

「あの男が株をやったら必ず名をあげるだろうな。そんな気がする。しかし名をあげた結果、会社に利益をもたらずかどうか、それはわからん、突き放せば虎にも狼にもなるが、育てかたさえよければ山一の瀬戸浩将の向うを張れるかもしれん」

「奥さんにどういう手紙を……」

大戸は口をつぐんだ。久住はやっと大戸の意中を察した。無関心に聞き流していい問題ではなさそうだった。

大戸元一は興業証券の創業者社長であり同時に東証の議長でもある。しかし証券界における彼の立場はそういった肩書を云々する以上に、《天皇》という彼に奉まつられた尊称が、証券界における絶対的な權威を象徴しているものであった。

「山鹿はいくつになります」

「たしか昭和四年……十四のときだったな。わしのところへ来たのは」

「では三十七歳」

「臺が立っていることはたしかだ」

久住は念を押すように、「辞めたのはいつだったでしょう」と聞いた。興業証券ではつい最近、途中退職者の再入社を認めない内規をつくったばかりである。それは大戸も十分承知しているはずだった。

「兵隊に行く時だから、戦後の連中と一緒にではない」

久住は口をつぐんだ。例外をつくることは困難だった。それ以上に内規を反古にすることはできない。しかし明らかに大戸は山鹿の例外を暗示する口ぶりである。久住の立ち場でそれを無視することはむずかしかった。久住時雄は七月末の臨時株主総会で、興業証券の社長に選任される予定になっていた。六十五歳で働きざかりの大戸には、いまあわてて興業証券社長を引退する理由はなかった。それだけに久住は大戸の配慮を強く感じていた。まもなく車は茅場町を左折し興業証券の正面に停った。

昭和二十七年七月、山鹿悌司は久住時雄の呼び出し状を手にも、外房の小湊を魚臭くてのろい汽車で発った。朝鮮動乱にともなう「特需」を背景に、立ち直りを示す日本経済の動向を映して、兜町は取引所再開以来、初のブ

ームに沸いていた。

山鹿は久住時雄の室で、一通の辞令を渡された。

「見習社員……これはどういうことです。僕に大学を出たての若いものと同じに働けというのですか」

久住から渡された辞令をみて、山鹿は聞きかえした。

「身分上の特別扱いは一切できない」

「一切というと」

「なにもかもだ」

「じゃ月給も……」

「初めは一万二千円。君は夜間部の大倉高商出だから、大学卒の初任給になる」

濃い眉を張った久住は、下唇を突きだして答えた。

「私は三十七歳ですよ。妻と四人の子供がいる。それだけじゃありません、兵隊に行く前、十五年間もこの店で働いてきた実績だってあるはずです」

「わかっている」

「じゃどうして」

「昔とはちがう。一万二千円の月給では君として不満もあるだろうが……」

「不満？ そんなことじゃありません。どうやって喰べ

ていくのですか」

「家族六人ではむずかしいな。が、そうしなければなら
ないんだ。戦後われわれはみんな、街頭で宝くじを売り
ながら凌いできた。そのときたくさんの人が、証券界の
前途に見切りをつけて辞めていった。しかしいまやっと
相場がよくなった。すると一度辞めた連中の再入社願
いが、人事課に殺到した。いまさらそういう人を再入社さ
せるわけにはいかない。だから途中退職者の再入社は、
一切認めない内規をつくった。規則通りやったら、君も
再入社はできなかったのだ」

紅潮した山鹿の顔がこわばった。

「私は再入社願いなど出してません。久住専務が店へ戻
る気はないかとおっしゃったから、戻ってもいいと答え
たまでです」

「たしかに私が誘った。山鹿悌司を新規に採用したかつ
たからだ。白紙の新入社員として、君を求めた」

「言い争う気はありません。しかしこの辞令は受取れな
い。返します」

山鹿の反抗的な姿勢を持て余して、久住は深く息をつ
いた。説得の方法をみえる。このまま山鹿を帰すことは、

大戸元一の期待にそむくことであった。

「困ったな……」

山鹿は聞えないふりをしていた。

「一時の身分など問題ではなからう」

久住はつづけた。

「君がもしこの条件で再入社すれば、再入社願いをだしている多くの人達は、みんな諦めざるを得なくなる。君以外の者では、とうていやれない条件だからな」

「私ならどうしてやれるんです」

「君ならやれる」

「再入社したがっている人達の希望をうち砕くために、私が人身御供を引きうけるんですか。いやですね」

山鹿は、二十四五貫もあろうという、大きな体をゆすって、突き放すように言い切った。だがそのとき、久住時雄の顔に、微かな笑いが浮かんだ。不器用な笑いであった。

「ほんとうにいやなのか」

「だいいち……」言い返そうとする山鹿を、久住は手で制した。

「大戸社長が失望されるぞ」

山鹿はハッと顔をあげた。強い衝撃であった。追いうちをかけるように、すかさず久住が続けた。

「社長は、どんなことがあっても、山鹿を会社へつれもどせとおっしゃっている。山鹿悌司を囑望しておられるんだ」

山鹿はのどまででかかった言葉をのんだ。二ヶ月前に彼は大戸元一に借金を頼みに行った。そのとき彼は、怒気を含んだ大戸の一喝にあっていた。

「いいかね。いずれわが社のエース投手になってもらうんだとおっしゃっている。社長がだ」

山鹿は組んでいた足をとき、姿勢を正した。大戸元一に見限られたと、彼は思っていた。大戸夫人に身のふりかたを相談する手紙を出したのも、そんな失望感からであった。夫人の配慮で、久住時雄が彼の再入社に便宜をはかろうとしているのだと思っていた。だが彼は、お情けを受けねばならぬほど、零落しているわけではなかった。見習社員で採用してやるという辞令に屈しなければならぬほど、窮迫してはいなかった。だから、はねつけた。しかし、大戸社長が、囑望……。

山鹿は、強く顎を引いた大戸元一の表情を思いうかべ

た。眉間を熱い血が駆けぬけた。

「魚のブローカーなど、一時的なものだ。長く続ける仕事ではない。まして漁師になるなど、論外だ。社長はそう考えておられる。君には株を扱う技術がある。それを生かせばスターにもなれる。これも社長の言葉だ」

ダメ押しにひとしい一言であつた。

山鹿は顔の表皮に滲みでた脂肪を平手ですりあげた。

「それでも君は断わるかね」

「……」

山鹿は力なく首を振った。久住の言葉には予想もしないひびきがこもっていた。

三ヵ月間、彼は本店営業部で、かつて彼の部下だった営業課長石井浩の部下として働いた。見習社員としての期限三ヵ月が過ぎると、こんどは係長の辞令を受けて受渡課へ配転になった。

2

朝鮮動乱を契機とした、日本経済の復興と、企業活動の拡大は、特需相場と呼ばれる活況を証券界にまき起し

た。とくに昭和二十七年秋以降の株式上昇相場は、大衆の投機熱の高まりで、空前の人氣現象を現出した。

その十月、相場は二段上げの騰勢にはいった。過熱相場の渦に追われるように、佐府良輔は茅場町の狭い貸しビルの二階に《佐府証券研究所》の看板をかかげた。当座の所員は二名。といっても所長の佐府自身と女子事務員が一人である。だが彼は、日本の経済専門誌としては最高の権威を誇っていた東邦経済新報社の編集長を辞しての旗上げであつたから、証券市場将来の飛躍を強く確信していた。

評論の分野としての証券は、当時まだ未開拓の処女地にひとしく、高名な経済評論家はいても、権威ある証券評論家は皆無だった。というより証券評論は、経済評論家の片手間仕事、実勢を基にした見通しや解説に依存する経済評論の一分野として付帶的な扱いしか受けていなかった。

株はいつでも極めて流動的で、また時には非論理的な媒体でもある。そしてそれは経済の現象的な傾向とは、必らずしも動きをとにもするものではなかった。むしろ当時のように、大衆の投資力を象徴した投資信託という

巨大な怪物が誕生し、急速な発展を示す勢いにあった時点で、株はますます経済の現象的な傾向の反映とは異った、独自の分野に成長してゆく趨勢をもっていた。

野心と言え言えないことはないが、佐府の狙いも、つまりはここにあった。証券評論は、いずれ独立した評論の分野として脚光を浴びる――。

だが、彼の同僚や友人の多くは、その試みに危懼を感じ反対した。

株は、所詮個人的な煩惱の満足に奉仕させられてしまふものだし、経済の大勢に従属してしか動き得ないものだ。と彼等は言った。証券評論とは言っても、媒体としての証券株が持つ本質的な宿命から、権威の付与にたいする一般の価値判断の基準が、たてた予想の当否でしか求められないことを、友人は恐れていた。

しかし彼は、株というものの持つ特殊性、特に資本主義機構の恥部の象徴とも言える株を探り、研究していくことで、経済記者として培った多くの知識や経験を、一段と深め、資本のメカニズムが持つ生命力にふれていきたいという信念を変える気はなかった。

昭和二十七年の特需相場は、爛熟の極点を目指し過熱

の様相を濃くして行った。そして翌昭和二十八年の三月、ソ連のスターリン首相急死の報を受け、狂乱の極に達した人気相場は、一瞬にして崩落する――。

「こんな時期に証券界へ舞い戻るなんて、僕も弘三郎さんも阿呆だ」

「僕は親父の命令だからな」

「僕だっておなじようなものだ。嘱望しているなんて言われちゃって。それがどう。いまじゃ受渡課で、株券を数えて暮してる」

「ヤマちゃんの再入社で、副社長の藤丸が怒ったそうだ。あいつがあんな戻りかたをするものだから、ほかの人達の再入社願いが、みんな駄目になっちゃったって」

「僕のせいじゃない。久住新社長のせいさ」

「ところが藤丸旦那は、久住と張りあっていたらね。旧腹心を大量にカムバックさせて、次期社長を狙っていた。でも、うちの親父も、藤丸を退けて久住氏を選んだあたり、なかなかだ」

大戸元一の三男にあたる弘三郎は、山鹿と同年だった。興業証券の前身大戸証券時代、大戸邸で走り使いを

していた山鹿は、弘三郎とは不思議に気があった。

弘三郎の興業証券入社は、山鹿より三ヵ月後だった。

もちろん、久住時雄の腹づもりとしては、将来の社長候補としてである。

「ヤマちゃんも、当分は藤丸副社長にいじめられるかもしれないな。あいつは女みたいに執念深いから……」

弘三郎がおどかさように言った。

山鹿は隣に座った女給をみた。小柄で眼ばかりやたらに大きくみえる女だった。

「お飲みにならないのね」

「君が飲めよ」

「ちいちゃん、彼は飲むぜ。馬より飲む」

取りなすように弘三郎が言った。

「すごいじゃない」ほかの女達が笑った。

「千佐子って言うんだ。彼女の恋人は、左翼の闘士だっていうから、惚れるんじゃないよ」

冗談のように弘三郎が言った。中国服の衿もとを強くしめつけ、男のような断髪である。山鹿はコップを持って千佐子の顔を覗きこんだ。光線のせいで蒼くみえた。

「スターリンが死んだから暴落したのか。暴落しようと

していたとき、スターリンが死んだのか」

弘三郎が意味のないことをわめいた。

「キミは秋刀魚が好きかね」

山鹿は千佐子に向きなおった。唐突な聞きかただった。

「ほら、青くて細長い魚だ」

「お客さんは好きですか」

千佐子が聞きかえした。ボーイッシュな直線の幅広い眉毛が、大きな瞳と釣りあって、利かん気な性格を感じさせた。せいぜい二十一か二らしい。

「キミに聞いているんだ。好きかどうかを」

千佐子の小さな顔に微笑が浮かんだ。羞かしそうに首をかしげて、

「あはれ、秋かぜよ、情あらば伝えてよ」

と、朗読でもするように言った。

「続けてくれ」

千佐子が首を振った。すると弘三郎が「男ありて夕餉にひとりさんまを食らひて」と続ける。山鹿は「やめろ」と手を振り、千佐子を正面からみすえた。そのとき、微かな花の香りが、彼女の髪から舞い立った。

「僕は一昨年の秋、秋刀魚で大博打をうった。房州の田

舎で借りられるだけの金を借り、仙台の塩釜で思いきって秋刀魚を買った。貨車で十輛だ」

「貨車で十輛!!」

ボックスの女達がいっせいに山鹿を注視した。山鹿はゆっくりとしゃべりはじめた。

「なんのために買ったか。もちろん高く売るためだ。出回りはじめたしよっぱなし、僕なりに成算があった。しかし、貨車で十輛の魚を買ってしまったから考えた。どうやら豊漁らしい。築地へまっすぐ運んだのでは、儲けが薄い。東京より西へ持っていたほうがいい。大阪なら、まだそんなに出回っていないだろう——。いわばひらめきだ。一種の賭けだ。ブローカーというのは、右のものを左に移して、マージンを稼ぐ、しかしそうはいかない場合もある。そのときは右のものを左に移すだけではなく、もっと遠くへ動かす。だが財布の底をはたいて秋刀魚を買ってしまったから、余分な金がない。そこで興業証券の仙台支店へ行つて、不足分の運賃を工面しようとした。しかし駄目だった。まごまごしたおかげで、とうとう魚を駅へ一日止めてしまった。ところが、次の朝、港へどつと船が入ってきた。驚ろいたね。船は船底

が抜けるくらいに、どれもこれもみんな秋刀魚を積んでいる。大豊漁だ。いかんと思った。この秋刀魚がいっせいに動いたら、たちまち相場は暴落だ。あわてて駅へとびこんだ。もう大阪だのなんだのと言っておれない。その時はもうしかし僕の貨車だけ動かすというわけにはいかん。大阪へ回そうなどと考えたことを悔んだ。悔みながら待ったよ。昼近くになって、やっと貨車が動いた。みると、全部秋刀魚を積んでいる。それが延々とつながっていて、僕の十輛なんてどこにあるのか見当もつかない。やられたよ。築地へ着いたら、状況はなお悪い。市場中、秋刀魚だらけだ。半値でも売れない。それに氷や塩を買う金もないから、待ったがきかない。投げた。二足三文の大投げだ。とうとう僕は、オケラになった」

女給の一人が、「それからどうなったの」と聞いた。

「女と寝た」山鹿はぶっきらぼうに答えた。

「あらいやね」

「女を拾って、秋葉原の旅館へ転げこんだ。人間、どん底へ追いつめられると、ただ無闇に女が欲しくなる」

「汚ない」

言ったのは千佐子である。山鹿は千佐子を一瞥した。

「三日間、女と寝ていた。そのとき、これがもし株なら、どうするだろうかと考えた。株なら……どでんする。どでんして倍に張る。起死回生の妙手になるかどうかかわからない。が、それしかテはない。僕はすぐに千葉の山武郡の農協へ電話した。地元では一尾十五円と聞いて、僕は十円にしようと言った。十五円なら、築地でスコップ一杯ある。すぐ築地へ走って、よくよく売れなくて困っているのを探した。かけあうと、後金でもいいと言う。すぐトラックに積んで、山武郡へ送りつけた。面倒だから、スコップ一杯百円で売りまくった。トラックの運転手が、明日も持ってきていいかと言う。じゃんじゃん持ってこいと答えた。こんどは儲けた。その金で兜町へ行って、権利落の神岡鋳業を百二十円で三万株買った。一カ月とたたないうちに、九十円に下がってしまった。魚は儲かる。しかし株は儲からない」

弘三郎が突然笑いだした。

「それが言いたかったのか、ヤマちゃんらしくないな。

親父の説では、ヤマちゃんの相場は、怖いくらい強気だそうだが……」

「相場をやらせてくれないじゃないか」

「当分はしようがない。藤丸副社長に睨まれているから。受渡課へまわったのもそのせいさ」

「オレは辞めるよ。興業証券なんて糞くらえだ」

二人はアラビアンをでて、何軒か飲んで歩いた。最後に山鹿一、か弘三郎と別れてまたアラビアンへ帰った。店は灯りの数もすくなかった。グラスを磨くバーテンが細い照明を浴びていた。

「お水をくれ」

バーテンは無言でコップを置いた。

「誰もいないの……」

バーテンは答えなかった。山鹿はカウンターに座った。無謀に飲み歩いた後の捨てばちな疲れを感じた。

「お一人——」

はっと顔をあげた。千佐子の声である。

「まだ飲むの……馬のように」

カウンターの物影である。立って椅子を押し退け、よろけながら声に近づいた。暗がりにも光る女の眼があった。

「そっちへ置いてくれない」

差しだしたグラスの液体がきらめいた。

「どこかへ行こう」

「秋葉原へ連れて行かれて、三日間？」

「まさか」

千佐子は笑った。

「わたしそういう相手をする女じゃないのよ」

山鹿は口ごもった。青く光る千佐子の眼がまぶしかった。家族との別居生活が投げやりな気持をそそった。

「オレは一人だ。どうしたらいいんだい」

「情けない声で言わないで」

「振られたな……」

山鹿はカウンターへ戻った。飲みかけのコップの水をあける。千佐子は立って更衣室へ入って行った。

「閉めますよ」

バーテンが無愛想に言った。追われるように店をでた。

湿っぽい夜である。舗道も濡れていた。あてつけがましく看板の灯が消えた。飲み明かせるような店はないだろうかと考えた。小走りに千佐子が追いかけてきた。

「どこへ行く気」

「どこへ行ったらいいんだ」

通りの人影はまばらだった。

「困った人ね」

そう言いながら千佐子は、そっと山鹿の腕をとった。

係長になって受渡課へまわってから二年間、山鹿はその単調な仕事にじっと耐えた。地味で目立たないポストである。彼の性格からいって、最も不得手な仕事と言ってもいい。しかし彼は戦前からの古い経験と、長い間の株券への馴染に助けられ、「暁に祈る」とまで言われた昭和二十七年末の、熱狂と暴落に踊った相場のかなで、受渡し事務の混乱も無事故でのりきった。

元来山鹿の生家は外房の小湊、九十九里につづく美しい海岸線で権の家と呼ばれた近在屈指の網元であった。隆盛時には何艘もの漁船を持ち、働く漁師の数もすくなかった。

だが五人兄弟の次男として彼が生れた頃、権の家はすでに衰運し、一艘の持ち船もなかった。急坂をころげ落ちるような家運の傾斜であったと聞かされた。彼は十四歳で大戸証券の小僧として大戸元一に引きとられた。大戸は彼自身が辿ったとおなじ悲運を背負った山鹿に眼をかけた。走り使いの小僧から、何年かたって場立ちとなり場へ出された。それは彼にとって出世だった。それか

らの山鹿はにわかには頭角をあらわし、先天的とも思える博才の片鱗を示しはじめた。彼は奇妙に勘がよかった。大戸は彼に最も投機的な新東の短期を扱わせ、かたわら夜学の大倉高商に通わせた。

彼は生真面目な人間だった。よく大戸元一が彼をつかまえて「お前には冗談もうっかり言えないな」と言ったりした。名を呼ばれると几帳面な返事のしかたをしたし、大倉高商の夜学部へ通いはじめると、一日も休まなかった。なんでも一つのことには熱中していくのだった。笑われてもひやかされても、彼はとん着しなかった。御法度とされていた手張りの味を覚えると、それをだれにも隠そうとはしなかった。小細工のできる男ではなかったのだ。要領は悪かったが、金儲けはうまかった。

山鹿は終戦の前年に応召し、生きては帰れまいと、その頃すでに大戸証券から興業証券と変わっていた会社から辞表をだした。彼の連隊は、沖縄の守備増援に送りこまれることになっていた。だが物理的な事情で沖縄行が不可能になり、その後は新兵の訓練要員になったりして死にもせず、終戦を郷里の房州で迎えた。その時は房州一帯で軍用品の調達に従事していた。戦争が終って、彼は

まっさきに大戸元一を訪ねた。「幸か不幸か、日本はアメリカに占領された。アメリカは資本主義の国だ。だから近い将来かならず株の時代がくる。落着いたらでてこいよ」

大戸は言った。

しかし山鹿は、とりあえずの生活を維持するため、海産物の集荷や販売に手をだし、魚介類のブローカーになっていった。久住時雄に呼び出され、一万二千円の見習社員として興業証券へ再入社してからは、小湊の兄夫婦のところの家族を銚子へ連れてきて、仲町通りで妻の園子に商売をやらせた。彼の収入で家族を養うことはできなかった。燻製品や樽せんべい、魚や蛤の干物をならべた小さな土産物屋である。山鹿は独りで東京のアパート暮らしをつづけた。東京と銚子の二重生活にもなれてきた。しかし山鹿にとってその二年間は、言うに言われぬ焦燥の明け暮れだった。囑望され、大戸元一に求められて戻ったはずだという自負が彼を迷わせ混乱させた。受渡課という事務作業は、エース投手になってくれと期待された人間のする仕事ではないはずだった。いずれ大戸はなにか言ってくるにちがいない。

——会長がオレを忘れるはずがない。

彼はそう思いつづけた。しかし二年は長すぎた。それに昭和二十八年、二十九年という時期は市況も悪く、証券界は、仕事の間として魅力を欠いていた。興業証券にしがみついている理由があるのだろうか、何度も疑った。そんなとき、突然大戸から「遊びにこい」と声をかけられた。

——忘れられていなかった。

そう思うと山鹿は、満身に希望を感じた。

「投信でもやってみろ」

大戸が言った。

昭和二十九年四月、彼は営業部へ配転になった。副社長の藤丸太加雄が、特に注意しておきたいことがあると言つて山鹿を呼んだ。

「おまえは投機的な男だ。だから営業部へ行っても絶対に株をやつてはいかん」

藤丸はただひたすら投資信託を売れと言つた。

その夜、大戸弘三郎の歓送会があった。

山鹿と相前後して興業証券へ入った弘三郎は、次の社

長候補として、一通り社内事情をのみこんだところで、興業証券のニューヨーク支店詰めになった。何年かして帰ってくれば重役である。

歓送会の後、山鹿は弘三郎と銀座へ流れてアラビアンへ行った。

「ヤマちゃん、短気を起すなよ。アメリカから帰ったら、腕をふるわせてやるから」

藤丸に呼びつけられたといういきさつを聞いて弘三郎が慰めた。アラビアンへ来たのは二年ぶりであった。山鹿は気が滅入っていた。無意識に千佐子を探した。

二年前のあの晩もこれとおなじ気持だった。彼女は彼を自分のアパートへ連れて行った。

「泊めてあげる」

「抱いてもいいか」

「駄目よ。わかってるでしょ」

「なにが」

「わたしそんな女じゃないわ」

「オレは君が好きだ」

「わたしそんな気ないのよ」

「抱かれてみなくちゃ、わからないだろう」